

ケンブリッジ大学と図書館

文芸学部 文化・歴史学科 教授 高 宮 いづみ

1. はじめに

2010年10月1日、夜9時をまわった英国ケンブリッジにたどり着いた。在外研究の機会を頂いて、筆者はそれから約1年の間、ケンブリッジ大学のマクドナルド考古学調査研究所に在籍しながら、考古学とエジプト学の研究にいそむることができた。1990年代前半に同大学で考古学の修士課程に在学していたので、17年ぶりの長期滞在であり、懐かしさとともに町と大学の変貌も実感することになった。ここでは、ケンブリッジの図書館を中心に、その事情と昨今の変化について個人的な所感を述べてみたい。

ケンブリッジ大学は13世紀に起源を発する古い大学であり、その図書館も14世紀の半ばまで歴史が遡る。ただし、同大学の図書館を単純な「施設」として語ることはできないであろう。それはこの大学とそれを中心とする町にたくさんの図書館が存在するからであり、主だったところでも、大学中央図書館の他に、各学科・学部図書館、各カレッジの図書館、研究所付属の図書館が挙げられる。古くから複数の図書館の有機的関連が同大学の知のネットワークの重要部分の一つであった（最も重要なのは人間である研究者のネットワークである）が、それは近年の資料のデジタル化とインターネットの普及によって、さらに重層化するとともに、大きな質的な変化も遂げていた。

2. 中央図書館

日本のどの大学にも中央図書館があるように、ケンブリッジ大学にもシンボリックな中央図書館が存在する。この中央図書館（University

Library）は、町と大学の中心部よりやや西方の独立した敷地の中に築かれたレンガ色の巨大な建造物で、蔵書数は7百万冊あまりをほこる。ケンブリッジは、庭と緑の多いところである。今回滞在中も筆者は、カレッジの庭を通して、四季折々の風景や栗鼠との遭遇を楽しみながら図書館に通った。



ケム川の風景

中央図書館の1階の玄関に入って階段を上った2階部分に、稀少本室やデジタル資料室を含む10室くらいの用途別の閲覧室がある。例えば主閲覧室（Reading Room）は、木製を基調とする高い天井を持つ広い空間で、大きな机の前に座り、荘厳な雰囲気の中で静かな読書に没頭できるようになっている。閲覧室を取り巻く広い廊下にも書架が並べられており、所々に木製の古い机が置かれていて、来館者は閲覧室以外の好きなおところで、本を読み思索することができる。筆者が頻繁に利用した閲覧室は、図書館の最奥部に位置するWest Roomで、閉架式の雑誌や書籍を請求して読むための部屋であった。請求してから本が出てくるまでに30分余りを要するが、その

間に壁面の書架に並んだ古い雑誌を見て歩くのも一興である。

ケンブリッジ大学の蔵書（中央図書館、学科・学部図書館、カレッジ図書館、関連研究所図書館を含む）は、現在“Newton”という名のオンライン・カタログ（近畿大学の“OPAC”にあたる）で検索できるようになっている。アイザック・ニュートンは、この大学で学び、やがてその教授職に就いた大学の歴史的な「顔」であり、筆者が住むフラット近くのパブにもその名が付けられていた。中央図書館の蔵書はあまりに多いので、まずは主閲覧室手前のカタログ室に据え付けられたパソコンを通じて、“Newton”に蔵書の在処を尋ねないと、目当ての書籍にたどり着くことは容易ではない。

中央図書館には、自由に図書を閲覧することができる開架式の書庫がたくさんある。筆者が最も好んだのは、閲覧室よりも本のおいの充滿する書庫で過ごす時間であった。例えば、考古学とエジプト学の書籍の多くが配架されている North Front は、図書館の東面北側の一角を占め、6階に別れている。閲覧室と違って各階の天井が低いのは、書棚の上の段まで手が届きやすいように設計されているからである。したがって、狭い階段を何度も折り返しながら書庫を上っていくことになるのは、近畿大学の中央図書館を含む日本の大学図書館でも見かける構造である。

書庫の内部は概して人が少なく、多くの部分が真っ暗である。本を探す時には、自分で必要な部分に電灯を付けるのだが、外から採光のある窓際には木の机が置かれていて、書架から取り出した書籍を近くでじっくり読むことができるようになっている。書架からあれこれの本を取り出して、誰もいない書庫の窓際で読む時間が至福の時である。スリッパ（「読書中」を示す細長い紙）を本の間に挟んでおけば、机の上に集めた本を何日かその場所にキープしておける。これは、ケンブリッジのたいていの図書館に共通する便利なシステムである。

ケンブリッジの図書館では、端的に言って「蔵書は使われることに意義がある」という理念が徹底されているように感じられる。前回滞在した際に、当時中央図書館の蔵書・資料の約40パーセントしか一般公開できていないことについて、司書の方が「たいへん遺憾である」との図書館側の認識を語っていらっしやった。しかし、公開できない60パーセントの大半は、『ゲニザ文書』（エジプト・カイロのシナゴグに所蔵されていた中世のユダヤ文書）のように、世界に1部しかないような稀少なオリジナルであって、あまりに壊れやすいために容易に公開できないのもやむをえない。むしろ、稀少図書閲覧室を訪れると、日本では稀覯本扱いでめったに閲覧できない書籍を、容易に閲覧することができる。

図書館における書籍の保存と公開は、長らく技術的に矛盾し、葛藤のある課題であった。しかし近年デジタル技術の発達によって、書籍原本を保存しながら、その内容をデジタル写真化して広く公開できるようになった。近畿大学でも2002年に『近畿大学中央図書館蔵「エジプト誌」』（雄松堂）（ナポレオンのエジプト遠征隊が収集した資料を出版した書籍）をDVDで公刊したが、ケンブリッジ大学ではかなりデジタル化が進み、Cambridge Digital Libraryとして『ゲニザ文書』等の収蔵資料の一部が図書館のウェブ・サイトで公開されている。

3. 学科・学部とカレッジの図書館

ここでは最初に大学にとってシンボリックな中央図書館を取り上げたが、ケンブリッジ大学では、学部学生にとってはむしろ学科・学部図書館の方が重要であると認識されている。というのは、中央図書館はなるべくたくさんの書籍を集めることを意図しているが、学術の基礎を学ぶ学部生にとって、中央図書館に集められた万卷の書籍の中から、基礎的学習に必要な書籍を見つけ出すことは容易ではないにちがいない。実は、中央図書館の利用者は、主に大学院生と研究者である。

同大学では、学科・学部別（学科別が多い）に図書館が設置されており、学部生が基礎を学ぶために読むべき書籍はこれらの図書館に集められている。基本的に学部生は基礎を学ぶ限りは中央図書館に赴く必要はなく、学科・学部図書館で概ね用が足りる。学科・学部図書館では特定の学術分野を扱っているため、細かいトピック別に書棚に書籍が並べられていて、書棚の前に行けば特定のトピックに関する書籍が一覧できるようになっている。さらに、学部と大学院の授業で教科書や参考文献として指定された書籍は、複数冊が書棚に置かれているのである。

このような学科・学部別図書館は、学部生だけではなく大学院生や研究者にも大いに役に立つ。筆者は考古学関連の文献収集のためにハドン図書館（Haddon Library）を、エジプト学関連の文献収集のために東洋学部（Faculty of Oriental Studies）図書館のエジプト学室を頻繁に利用した。学科・学部図書館の効用は、それぞれの専門分野に関連する①重要・基本文献を速やかに閲覧できること、②基本学術雑誌が容易に閲覧できること、③同じ専門を志す学生・研究者が同じ図書室で学習することで、コミュニケーションが生まれることなどなどである。

ハドン図書館は、考古・人類学科が講義教室を持つ建物の主に2階と3階の一角を占めている。2階の広いメインフロアに多数の書架が並べられていて、考古学と人類学の基本的専門書籍が配架されている。また、3階の書庫に主要な専門学術雑誌が概ね揃えられている。これらを参照すれば、学術論文執筆のために必要な基礎的参考文献の多くをクリアできるので、非常に効率がよい。さらに、自分の特定の関心領域の周辺課題に関する概括的な知識を得ることも容易である。

17年ぶりにケンブリッジに戻って、ハドン図書館を再び利用する機会を得たが、昔と同じ司書の方がいらっちゃった。つまり、20年も務めているわけで、この図書館に愛着を持ち、実に蔵書について詳しくあった。学問に対

して気長に伝統を重んじるケンブリッジの気風の顕れであろう。



ハドン図書館の雑誌室

ケンブリッジ大学の特徴の一つは、カレッジ（学寮）という学生と研究者の生活を支えるシステムが存在することである。カレッジの歴史は学部よりも古くまで遡り、現在30以上あるカレッジがそれぞれ独自の経済基盤を持って、所属する学生・研究者の居住や学習環境を提供している。各カレッジにも図書館もしくは図書室があり、古いカレッジは立派な図書館と中央図書館にも劣らない貴重な蔵書を有している。筆者の所属したカレッジは比較的新しいので図書館に稀覯本はほとんど無かったものの、息抜きに読む小説を借りるのには便利であった。カレッジの性格に即して、娯楽を含む生活に密着した図書利用も考慮されていたのであろう。

4. 大学図書館の利用者

大学図書館を誰が使えるのかは、図書館の存在意義と密接に関係する。近年日本の大学も図書館利用者の幅を広げてきたが、かつては利用者が概ね現役在校生や教職員に限定されることが多かったように思う。

ケンブリッジ大学は、既に1990年代前半には（あるいはずっとそれ以前から）、卒業生に生涯的な図書館利用の資格を与えていた（卒業時に10年有効かつ更新前提のカードを与えた）。その背景には、この大学を卒業した学生は、書籍に対して愛着を持って大切にするに

ちがないという信頼、卒業後に何らかの社会に貢献する人材に育っているはずであるという教育成果に対する自負、および卒業生がさらに社会貢献できるように大学は常にサポートしていくという強い意志が感じられた。

これは、卒業生にとって、大学が発信する学生・卒業生との信頼関係に関する強烈なメッセージでもあった。多くの卒業生は、在学中の充実した教育内容に対する感謝の気持ちだけではなく、図書館利用権付与を通じて大学から信頼を表明されたことやその実際的な恩恵によって、大学への生涯的な帰属意識と愛校心が喚起されることになるのではないだろうか。実際、筆者も躊躇いなくたびたび大学やカレッジに寄付することになった。

これらのことは、大学図書館が、人間の信頼関係を醸成する機会をも創造し得ることや大学の経済にも貢献し得ることを意味する。

5. 学術情報利用の現在と未来

先に、長期的にあまり変わらなかった部分のケンブリッジにおける図書館事情を述べてきたが、筆者は本と図書館好きにもかかわらず、気が付けば今回の滞在中に物理的に図書館に身体を移動する時間が少なくなっていた。その主な理由は、筆者のように文系が研究対象でも、パソコンを通じて得られる学術情報量が著しく増加したからである。

今回所属したマクドナルド考古学調査研究所では、2人の研究者と同室の個人研究室、机、パソコン、書棚などを提供していただいた。個人研究室のパソコンを通じて“Newton”やGoogle Scholarにアクセスすると、大学が契約している電子書籍や学術雑誌等の論文は、簡単にダウンロードして無料で入手することができるようになっていた。近年のインターネットを通じた特に欧米言語の学術情報検索システムの急速な発展には目を見張るころがあり、自宅からでも入手できる学術情報が増えたが、さらにケンブリッジ大学が相当数の講読契約をしていたために、図書館に足を運ぶよりも研究室で短時間のうちに入手でき

る学術文献数が圧倒的に増えていたのである。現在、図書館の蔵書数だけではなく、電子書籍・雑誌の契約数が最新研究の勝負を決する時代になっていることを実感させられた。

また、アマゾンをはじめとするいくつかの書店がインターネットやメールで注文を受けており、欧米書店からは3日から1週間以内で注文書籍が手元に届くシステムができています。さらに、ブロード・バンドの普及によって、画像・動画などの大容量情報や古い書籍のPDFファイルがインターネットから入手できるようになっていたことも、物理的な図書館離れを促した。

それでは電子媒体で事足りるかということ、かえってそうではないことも実感された。容易に入手できる電子媒体から得られる情報を知っておくのは当たり前になり、知っておくべき情報のハードルが高くなったが、電子媒体から入手できる情報が、内容的に優良な情報であるとは限らない。電子媒体を通じた過剰な情報の奔流の中から、研究や教育にとって真に有益な情報を得るためのメディア・リテラシーは、未だに確立の途上にある。

また、人間は身体と五感を持った社会的生き物であるので、むしろ書籍の色や形、手触りや匂いなどが思考や感情と連動して人間らしい知性を育てていくように思われる。風格のある図書館と書籍が並んだ暖かみのある空間、くつろげる緑豊かな庭、カレッジでの友人たちとの食事、毎日のように行われる研究会やその後のワイン・パーティーなどなど、ケンブリッジで、インターネット・図書館と書籍・人間関係という重層化した知のネットワークの重要性を改めて感じる事ができた。未来の大学図書館が、こうした知のネットワークの中で伝統的な暖かみを保ちつつ発展していくことを祈りたい。

